

[研究論文]

# モンゴルの装飾文様 アーカイブの創造

—北方ユーラシアからアイヌ、縄文まで—

深津裕子

港 千尋

佐々木成明

ヲノサトル

Creating Mongolian Decorative Monyo Archives : From Northern Eurasia to Okhotsk, Ainu and Jomon

Yuko Fukatsu Chihiro Minato  
Naruaki Sasaki Satoru Wono

Monyo are decorative designs of the variety typically found on clothing, arts and crafts, and architecture. They are visual images deeply connected to our everyday lives, boasting a heritage as long as the history of human creativity itself. In this study, we intended to achieve a comprehensive study of creating Mongolian decorative monyo database and archives using multi-media. Firstly, we collected monyo from historical and cultural heritages, rituals, daily lives and festivals at contemporary society in Mongol, and we analyzed them from our points of academic fields such as art anthropology, visual arts, music, and costume studies. Secondly, we explored relationships between Mongolian decorative monyo and those of other cultures such as from Ukraine to Japan including Okhotsk, Ainu and Jomon culture. As results, three short movies, approximately 600 images of monyo, an auto generated monyo application, those of which shows from the origin to transition process of monyo toward 21<sup>st</sup> Century, were presented and placed into Tama Art University Monyo Database and Archives (TAMA MON22 on Web). In an exhibition, *Mongol: The Empire of MON-YO*, we presented the result of our study including images, a model of gel, a wall hanging textile and costumes, and images of Mongolian decorative art and culture. In addition, we utilized this exhibition for educational Art & Design activities such as open classes for students, gallery talks, and a panel discussion to the public. As results of tracing the changes of monyo from the beginning toward contemporary society in the 21<sup>st</sup> century, we concluded that the Mongolian monyo has diverse including (1) the animal and geometric monyo by the nomadic tribe represented by historical and cultural heritages, (2) religious and auspicious symbols inspired by Tibetan Buddhism, and (3) the national emblem *soyombo*.

## 1. 緒言

文様とは人間が創造したヴィジュアルイメージで、美術工芸品・建築物・服飾などに見られる装飾的なデザインを指す。文様は私たちの日常生活と深く結びついた視覚的イメージであるとともに、人類が創造してきた遺産にも刻まれ長い歴史を誇る。世界の様々な地域の文様を「文化の諸相が表象されたもの」、人間がデザインしたヴィジュアルイメージとして捉えると、文様からの学びはアートやデザインなどの人間の創造への関わりだけでなく、文化や社会の諸相の研究、人間を知ることにつながると筆者らは考える。これまでの研究では多摩美術大学（以下、「本学」とする）文様研究所の所員らが国内外で実施した1970年代の研究実績<sup>(1)(2)</sup>を研究モデルとし、21世紀のメディアを活用し新たな手法を推進してきた<sup>(3)-(6)</sup>。その成果はいくつかの報告書<sup>(7)(8)</sup>、文様をテーマにした映像作品<sup>(9)</sup>、展覧会で公開するほか、論文としてインドネシア諸島の特徴的な文様<sup>(10)</sup>、杉浦非水（1876-1965）による近代日本のデザイナーアーカイブ<sup>(11)</sup>、日本の蔓草装飾文様の発生と展開を提示し、文様データベース&アーカイブスにおいて公開してきた<sup>(12)</sup>。

これまでにモンゴルの歴史・民族・文化・美術に関する人類学的研究<sup>(15)</sup>、美術工芸史研究<sup>(16)(17)</sup>、歴史的研究<sup>(18)</sup>がすでになされてきたが、装飾文様に特化した研究やアーカイブ構築に関する取り組みは少ない。筆者の一人である深津は本学アートアーカイブセンターの所員として、文様アーカイブを大学の学術資源として位置付ける研究を、港は本学アートとデザインの人類学研究所の所長として芸術という営みを人類史の時空から捉えなおす研究を行っている<sup>(19)-(21)</sup>。筆者らは美術大学の教員として、現代社会で急速に発展する情報技術に伴い、多様化するアーカイブのあり方、先端技術を活用したアート及びデザインの役割と可能性を議論してきた。そしてアーカイブは従来の検索や辞典の装置から、社会生活における流動的な情報やイメージの記録・記憶・継承などの役割を果たす包括的な装置、コミュニケーションの場、創造の場であると捉えている。従って、本稿では、第三者が更なる考察や探究ができるようなアーカイブ構築の成果を示すとともに、モンゴルの装飾文様の収集を中心に、北方ユーラシア大陸の諸民族の文化からその東に位置する日本のオホーツク文化及び縄文・アイヌの人々を一部含む装飾文様の諸相を考察する。

本稿は公益財団法人三島海雲記念財団第59回学術研究奨励金「モンゴル装飾文様アーカイブの創造—北方モンゴロイドから縄文・アイヌ文様へ—」（人文学部門共同研究）により、6名の共同研究者と1名の外部有識者<sup>(23)</sup>で実施した成果の一部である。

研究の対象はモンゴル文化に内在する多様な装飾文様を中心に、北ユーラシア、オホーツク、アイヌ、縄文に関連する装飾文様である。研究手法としては、文様を芸術人類学・美術・建



図① モンゴル文様データベース掲載画像「モンゴル文様プロジェクト Web サイト」より [https://tamabi.ac.jp/research/tamamon22/Mongolian-project\\_Ainu\\_Jomon/MpAJ\\_index.html](https://tamabi.ac.jp/research/tamamon22/Mongolian-project_Ainu_Jomon/MpAJ_index.html)

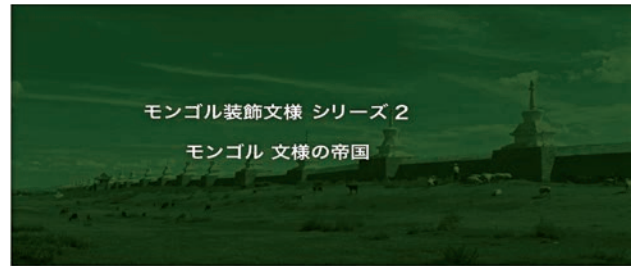
築・服飾・工芸・映像・写真・音楽の視点から複数のメディアを活用して多面的に考察し、その成果をアーカイブに総括した<sup>(24)</sup>。

2021年6月より国内での資料調査に着手し、コロナ禍での渡航制限期間を経て2022年7月にモンゴル国で開催される祝祭「ナーダム」取材し、その映像記録とともにモンゴルの特徴的な装飾文様を静止画・動画で撮影のうえ、テキスト情報を添えて収集する。併せてユーラシア大陸から日本のオホーツク文化、アイヌ及び縄文時代の文様についても同様に収集を行った。そして、これらをあわせ装飾文様の発生から21世紀の現代社会に至るまでの変遷過程を辿ることができるような文様アーカイブを制作した。

本稿では、筆者らが各専門領域から調査研究した成果を総括する。1. 緒言、2. モンゴル装飾文様アーカイブ、3. モンゴルの装飾文様の諸相を深津裕子、4. 北方ユーラシアを巡るメアンダー文様についてを港千尋、5. モンゴルのサウンド——〈倍音〉という文様——をヲノサトル、6. モンゴルの吉祥文様を佐々木成明、7. 総括を深津裕子が分担執筆した。

## 2. モンゴル装飾文様アーカイブ

モンゴル装飾文様アーカイブを構築するために、約600点のイメージ画像とデータを含む文様データベース、吉祥文様の自動生成アプリケーション、映像3作品、モンゴル・オホーツク・縄文・アイヌの記録写真を制作した。これらは、筆者らが2018年3月より運営する多摩美術大学文様研究プロジェクトデータベース&アーカイブス (TAMA MON 22 on Web) 内に位置付けた「モンゴル文様プロジェクト」<sup>(25)</sup>に総括し2023年6月より公開した<sup>(26)</sup>。また、報告会と展覧会を開催し、大学及び社会に向けたアート・デザイン教育の普及活動に努めた。「モンゴル文様プロジェクト」に掲載した文様データベース、文様映像作品、自動生成文様アプリケーション、報告会・展覧会の概要を以下に述べる。



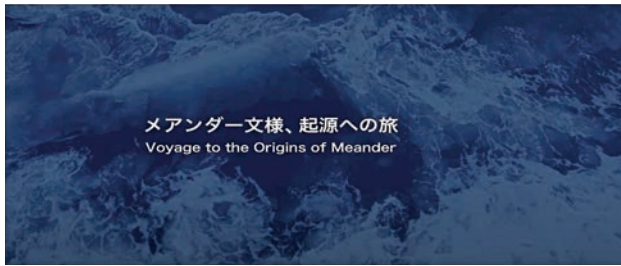
図② 文様映画《モンゴル 文様の帝国》2022年、上から a. タイトル画像、b. ハラホリンの草競馬、c. 天幕

### 2.1 文様データベース

共同研究メンバーが収集した文様画像約600点とテキスト情報をまとめた。図①にデータベース画面の一部を示す。ウェブサイトにはイメージ画像を並列させて表示し、各画像をクリックすると付随するテキストデータの詳細が記載される。各文様は、イメージ画像・カテゴリー（植物・花・幾何学・抽象・空想生物・神話伝承・人間・文字・自然・宇宙・動物・その他）・収集した国・収集した場所・収集したアイテムの名称・素材・特徴・収集年・収集者からなる。文様はジャンル別（a. 植物、b. 植物・花、c. 幾何学・抽象、d. 空想生物、e. 神話伝承、f. 人間・文字、g. 自然・宇宙、h. 動物、x. その他）でも検索、閲覧できるようにした。

### 2.2 文様の映像作品

本研究を総括的にまとめた文様映画3作品《モンゴル文様の帝国》、《メアンダー文様、起源への旅》、《アイヌと北方モンゴロイド》を制作した。《モンゴル文様の帝国》では、現地調査に基づくモンゴルの時代や部族を超えた多様な装飾文様に関する筆者らの考察を映像にまとめた。《メアンダー文様、起源へ



図③ 文様映画《メアンダー文様、起源への旅》2022年、  
上から a. タイトル画像、b. 動物文様、c. 解説の様子



図④ 文様映画《アイヌと北方モンゴロイド》2022年、  
上から a. タイトル画像、b. 川上裕子氏、c. イナウ

の旅》は港が中心となり縄文の文様を考察し、北海道千歳市のキウス周堤墓群から出土した縄文時代後期の石棒からユーラシア大陸の先史時代までを辿った映像にまとめた。《アイヌと北方モンゴロイド》は佐々木が中心となり、現代アイヌ刺繍家への取材を記録した。各映画のイメージ画像、作品クレジット、概要を以下に示す（図②～④）。

### 2.2.1 《モンゴル 文様の帝国》

企画・制作：多摩美術大学モンゴル文様プロジェクト

■ディレクション：佐々木成明 撮影・シナリオ：佐々木成明・深津裕子・勝又公仁彦・ヲノサトル・降幡真<sup>(29)</sup> ■編集：齋藤彰英<sup>(30)</sup> ■コンポジット&MA：齋藤彰英<sup>(30)</sup> ■ナレーション：山川冬樹<sup>(30)</sup> ■音楽・サウンドデザイン：ヲノサトル ■モンゴル語発音監修：バドラー・テムリン<sup>(31)</sup> ■文様トレース：深津真彩<sup>(32)</sup> ■協力：多摩美術大学美術学部情報デザイン学科メディア芸術コース

©多摩美術大学文様研究プロジェクト

2022年7月、モンゴル国の首都ウランバートル、モンゴル中西部でモンゴル帝国の首都であった古都カラコルム（現ハラホリン、ウブスハンガイ県）でナーダム祭の祭典、遺跡、記念碑、寺院、伝統的な移動式住居、博物館、美術館等で装飾文様を取材した。豊かな大地に恵まれたモンゴルは、古代から遊牧民族により育まれてきた豊かな文様、隣接する国々や宗教文化の影響を受けた文様が入り混じる「文様の帝国」である。文様は遺跡、建築装飾、宗教儀礼、生活用品、衣服だけでなく祝祭の場を華やかに装飾している。モンゴルの代表的な文様ソヨンボは国旗や国章にシンボリックに表され、仏教寺院では八つの吉祥文様が建築装飾や儀礼用品に見られる。中でも幾何学文様のウルジーヘーやアルハンヘーは信仰だけでなく生活の場の至る所で見られる。そして祭典に集まる人々は馬を伝統的な馬具で装飾し、国内外の様々な文様を取り込んだ民族衣装で正装している。モンゴルの楽器や音律を解析すると、音律が文様のように奏でられ、モンゴルの自然や地形と音律が密接に関係している。モンゴルはまさに「文様の帝国」であり、文様は人々

と天空と大地と自然が共生しながら創出された賜物であり、先史時代から現代までが文様で象徴されている。

### 2.2.2 《メアンダー文様、起源への旅》

企画・制作：多摩美術大学モンゴル文様プロジェクト

■ディレクション・撮影・シナリオ：港千尋 ■出演：茅原明日香・アンナ・カルボルフニチャ・伊藤佐紀 ■編集・コンポジット & MA：齋藤彰英<sup>(30)</sup> ■ナレーション：山川冬樹<sup>(30)</sup> ■音楽・サウンドデザイン：ヲノサトル ■撮影協力：千歳市教育委員会埋蔵文化財センター 茅原明日香・直江康夫／北海道立埋蔵文化財センター 倉橋直孝・坂本尚史／北海道立北方民族博物館 笹倉いる美／網走市郷土博物館 梅田広大／斜里町立知床博物館 佐々木剛志／函館市縄文文化交流センター 前田正憲 ■調査コーディネーター・撮影協力：さっぽろ芸術文化研究所 ■ドローン撮影：伊藤佐紀 ■協力：多摩美術大学美術学部情報デザイン学科メディア芸術コース

©多摩美術大学文様研究プロジェクト

メアンダー meander 文様とは、一定方向に連続する方形の文様で「ギリシャ文」とも呼ばれ、<sup>(33)</sup>モンゴルの文様では「アルハンヘー（雷文）」に相当する。

本作は北海道千歳市に所在するキウス周堤墓群から出土した、一本の石棒を取り上げて、これをユーラシアの先史時代の中で眺めていく試みである。縄文時代後期に作られた石棒のメアンダー文様は、遠くウクライナの地で発見されたマンモスの牙製の腕輪にも見られる、最も古い文様の一つである。ウクライナから北海道へ来たアンナ・カルボルフニチャが石棒を手にして縄文の美に出逢いながら文様の遙かな地平を紹介する。

およそ 15000 年前に起きた地球規模の気候変動により長い氷河期が終わり、日本列島は温暖湿潤な気候に変化した。海水面の上昇により大陸から切り離された北海道でも、落葉広葉樹林が拡がり、森や海の恵みを利用した生活が始まった。1 万年もの長期にわたり安定した社会を支えたのが土器の発明である。表面に縄目の文様をつけられた土器から名付けられた縄文時代はその名のとおり「文様の文明」と呼んでもよいくらい、多様で複雑なデザインを出現させた。

### 2.2.3 《アイヌと北方モンゴロイド》

企画・制作：多摩美術大学モンゴル文様プロジェクト

■ディレクション・撮影・シナリオ：佐々木成明 ■出演：川上裕子 ■編集・コンポジット & MA：齋藤彰英<sup>(30)</sup> ■ナレーション：山川冬樹<sup>(30)</sup> ■音楽・サウンドデザイン：ヲノサトル ■文様トレース：阿智 ■シナリオ構成アドバイザー：マユンキキ ■制作協力：にむ倶楽部 横山信 ■協力：多摩美術大学美術学部情報デザイン学科メディア芸術コース

©多摩美術大学文様研究プロジェクト

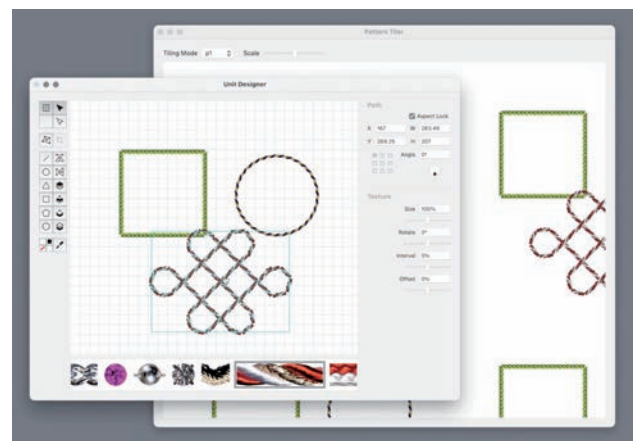
北海道札幌市にある「にむの森（にむ倶楽部）」でアイヌの伝統文化を現代に継承する川上裕子（1948-）に取材した。北海道沙流郡平取町の二風谷出身のアイヌ刺繍家、川上裕子の伝統的なアイヌの住居「チセ」<sup>(35)</sup>を中心に継承される文化、現代アイヌの生き方をはじめ衣服に刺繍する文様の意味、家族の絆、オリジナリティについて記録した。

アイヌの人々は、北は樺太から北東の千島列島、ロシアのカムチャツカ半島、北海道を経て、南は本州北部にまたがるオホーツク海地域一帯に居住してきた。アイヌの人々は独自の言語であるアイヌ語を継承し、自然と共生した豊かな信仰と文化を育んできた。そして生活や信仰の場で使う調度品や衣装と装身具には独創的な装飾文様が見られる。文様は男性が行う木彫り、女性による刺繍によって、親から子へ受け継がれてきた。アイヌの文様を見ていくと、制作された時代や地域や作り手により特徴が異なるように見える。現在ではアイヌの人々が保持してきた文様に由来するデザインを施した商品も多く販売されている。川上氏をはじめとする現代アイヌの彫刻家や刺繍家の装飾文様には、昔と変わることのない地域性や伝統文化に加え、作り手のオリジナリティや想いが込められている。

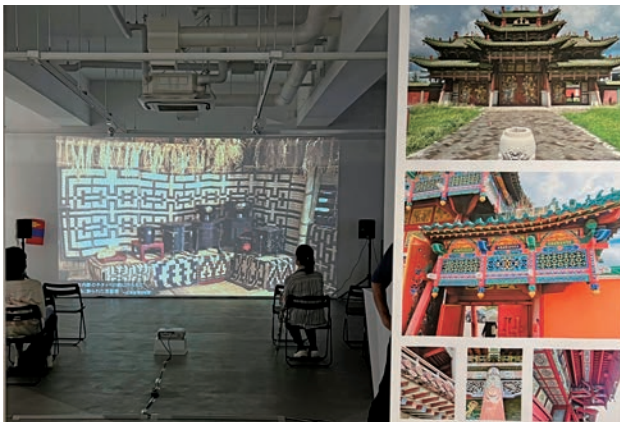
### 2.3 《吉祥文様生成アプリケーション Ulzii hee 2022》

モンゴルで吉祥文様として知られる無限結紐文様に着目し、様々なパターンと素材やテクスチャーで自動生成できるようなアプリケーション《吉祥文様生成アプリケーション Ulzii hee 2022》<sup>(36)</sup>を制作した（図⑤）。

本アプリケーションでは、ベジェ曲線で描かれた模様や線に素材のディテールやテクスチャーを自由に加えることで、これまでにないオリジナルの形やデザインの文様を創造できるようにした。画面上で幾何学形態を選択し、ディテールの素材感や



図⑤ 《吉祥文様生成アプリケーション Ulzii hee 2022》2022年、企画制作：佐々木成明、技術開発・プログラミング：堀口淳史



図⑥ 《モンゴル 文様の帝国》展, 2023年, 告知資料, デザイン: 佐々木成明, テキスト: 深津裕子 (上)  
 図⑦ 展示の様子《モンゴル 文様の帝国》展, 撮影: 深津裕子, 2023年6月 (下)



図⑧ 展示の様子《モンゴル 文様の帝国》展, 撮影: 中村羽葉, 2023年6月9日 (上)  
 図⑨ トークセッション《モンゴル 文様の帝国》展, 撮影: 中村羽葉, 2023年6月9日 (下)



図⑩ 展示パノラマ《モンゴル 文様の帝国》展, 撮影: 深津裕子, 2023年6月8日

テクスチャーを加える、あるいは幾何学形態の形状を変容させながら自由な形を形成した上でディテールの素材感を加えることができる。そして、それらを上下左右に繰り返し配置する、あるいはミラーイメージなどに配置させることで、新たな文様の連なりを形成することができる。単体の文様デザインだけでなく、テキスタイルに用いられるようなりピート・パターンをデザインすることも可能である。また異なる文様の組合せも可能であるため、形・色・ディテールを選択しながら自由なカスタマイズによる新たな文様の自動生成が可能である。

## 2.4 展覧会《モンゴル 文様の帝国》

研究成果は2022年度に開催した中間報告会と2023年度に本学アートテークギャラリーで開催した「モンゴル 文様の帝国」展で公開した。展覧会の告知資料、展示会場、トークセッションの様子を図⑥から図⑩に示す。

本展では、現地で収集した文様資料約600点から抜粋した200点のイメージ画像をwebサイトの文様アーカイブと合わせて展示し、文様映画3作品、文様生成アプリケーション《ウルジーヘー2022》<sup>(37)</sup>、モンゴル・縄文写真作品、モンゴルの建築装飾写真、移動式住居(ゲル)模型<sup>(38)</sup>、モンゴルの服飾装飾写真、

*National Costumes of the M. P. R* (1967年刊行)<sup>(39)</sup>より民族衣装図版の一部、アイヌ写真・服飾資料<sup>(40)</sup>を展示した。そして展示資料をもとに教育普及活動として大学生を対象とした公開授業を行った。また一般を対象にギャラリートーク、トークセッションを開催し、7日間の会期中に808名の来場者を得た。

公開授業に参加した大学生からは、「美しいモンゴルの文様に魅了された。繊細なデザインが文化の豊かさを伝える、心躍る展示だった。」「国際性を感じる様々な文様と鮮やかな色彩がとてもおしゃれて驚いた。」「自分でオリジナルの文様を考えてみようと思う。」「北海道の縄文の土偶がモンゴルの力士の格好に似ている、アイヌ文様とモンゴル文様が似ていることから繋がりを読み取ることができて驚いた。」「文様を辿ることで、モンゴルとアイヌに限らず世界で今とは違う地域の繋がりを知ることに関心を持った。」「モンゴルの伝統的で華やかな文化に現代に継承される尊さを感じたが、アイヌの文化が消滅してしまうかもしれない危機感を感じた。」等多様な意見を得た。

名称：モンゴル 文様の帝国

副題：モンゴル装飾文様アーカイブの創造 第59回三島海雲

記念財団学術研究奨励金（人文科学部門共同研究）成果報告

会期：2023年6月7日～6月14日（日曜休廊）

会場：多摩美術大学アートテークギャラリー2階

主催：多摩美術大学モンゴル文様プロジェクト

助成：公益財団法人三島海雲記念財団

協力：多摩美術大学美術学部情報デザイン学科メディア芸術研究室・多摩美術大学美術学部リベラルアーツセンター、多摩美術大学アートアーカイブセンター、多摩美術大学教務部研究支援課、多摩美術大学美術館、川上裕子

関連事業：公開授業（美術学教科目：染織史1・服飾文化論1・染織文化研究ゼミ・教養総合講座、美術学部情報デザイン科目：写真論・演習、大学院科目：染織文化特殊研究、メディア芸術演習）、トークセッション（2023年6月9日）

企画構成：深津裕子・佐々木成明

展示：深津裕子・港千尋・佐々木成明・勝又公仁彦

展示補助：小林優希・中村羽葉・浜崎祥多・江本葉那・有山風由・久保寺美羽・松本芽依・柿沼莉帆・深津真彩・新妻杏樹（学生）

監視：鳥越梨瑛

来場者：808名

### 3. モンゴルの装飾文様の諸相

本章では、先史時代から現代に至るモンゴルの特徴的な装飾文様について、岩絵、石彫、考古繊維遺物、移動式住居・寺院建築<sup>(41)</sup>、宗教儀礼用品、馬具、服飾を中心に考察した。モンゴル・アルタイ山脈の岩絵群と考古遺物染織品に見られる動物文



図10 動物文様トレース3種「モンゴル・アルタイ山脈の岩絵群」より、作成：深津真彩

様、建築及び宗教儀礼用品や調度品及び馬具等に見られる吉祥文様、服飾品に見られる多様な文様について述べる。

#### 3.1 岩絵群からフェルトの動物文様まで

世界文化遺産として2011年に登録された「モンゴル・アルタイ山脈の岩絵群」はバヤン・ウルギー県に所在する3つの岩絵遺跡群で、紀元前11000年頃から西暦9世紀頃までにわたるモンゴルの人々の生活様式や自然環境を知ることができる貴重な資料である。岩絵に描かれたマンモス、オーロックス、ヘラジカ、アイベックスのような動物の他、狩猟をする人、騎乗する人などが見られ、弓を持って狩猟する様子や騎馬像<sup>(43)</sup>も描かれている（図10）。

ユーラシア大陸で活躍した世界史上最初の典型的な騎馬民族として知られるスキタイは、装身具や武具を豪華な金銀珠玉で装飾、勇壮な鳥獣文様を黄金の飾板や鞍覆<sup>(45)</sup>に遺す。匈奴は紀元前3世紀末に騎馬民族国家を築き、モンゴル高原の遊牧民族を統一した。上層階級は西域製毛織物、中国製絹織物の帳幕、衣服には毛皮とフェルト（毛氈）の他に中国製絹織物を用い、馬具装飾等には動物を含む文様装飾を施した。匈奴の古墳群ノイン・ウラの出土遺物には、青銅製容器・装身具・馬具・漆器のほか染織に絹製帳幕・衣服・敷物・掛布等が含まれる<sup>(47)</sup>。動物文様が装飾された染織裂からは全容の把握は困難であるが、ザナバザル美術館前のアスファルトに大きく刻まれた敷物の図像（図10）、他の染織裂の記録<sup>(49)</sup>などを参照すると大きな一枚布の形状であったことが推察される。そこには大小の渦巻文様、四角・十字等の幾何学文様、動物文様、樹木文様などが含まれる。動物文様は2種類見られ、架空の聖獣シームルブのような翼を



図12 ザナバザール美術館前のアスファルトに彫られた染織布に由来する文様，撮影：深津裕子，2022年7月10日（左・中）

図13 鳥獣格闘文様2種，ノインウラ発掘フェルト敷物断片（モンゴル国立博物館・エルミタージュ美術館所蔵）より（右）作成：深津真彩

もつ獣がヘラジカの背後から襲撃するさま、マンモスあるいはオーロックスのような四つ脚の動物が格闘するさまを表した文様である（図13）。制作方法は、フェルトを中綿に表裏の布を刺し縫いして下地裂を作成し文様を加飾したものと思われ、縁布の中国製絹紋織物が後付けされている。

### 3.2 建築及び器物に見られる仏教由来の装飾文様

モンゴルの寺院や宮殿建築、宗教儀礼用品及び美術工芸品には、仏教に由来する八吉祥文様である法螺貝・双魚・蓮華・宝傘・勝幢・宝瓶・法輪・吉祥紐をはじめ、龍や獅子の文様が見られる。特に建築物は多種多様な装飾文様で埋め尽くされた立体的文様アーカイヴのようである。

現代モンゴルで最も広く普及するウルジーヘーは組紐文様で永遠に解けることのない無限結紐である。アルハンヘーは直線を曲折させ連続することで構成された雷文様や、後述するメアンダー文様の一種で、吉祥や豊作の象徴である。これらの文様は銀・皮革細工をはじめ器物から天幕及び壁面までを装飾する。その他にもハーンボゴイブチは、2つの円を連ねる文様で王の腕輪、男性を象徴する文様である。ハタンスイフは、2つの菱形を連ねる文様で女王の耳飾り、女性を象徴する文様である。さらにハス・ヨンドンヘーはサンスクリット語で幸福を意味するいわゆるスワスティカ（卍）、プーンジンヘーは「寿」の文字に由来する縁起のよい文様で装飾的にデザイン化されており、アジア圏でも頻繁に見られる。

モンゴルにはチベット仏教の影響を受けて建立された寺院が幾つかある。かつてモンゴル帝国の首都であったカラコルム（現、ハラホリン）には、1586年にアプタイ・サイン・ハーン

が建立したエルデネ・ゾー寺がある。図14の建築物上部に見える法輪はダルマチャクラとも呼ばれ、車輪の形をモチーフに仏教の教義を象徴する。建造物の外装には龍や獅子をはじめ蓮華文や雷文様及び幾何学文様で装飾され、内部の柱や垂木には極彩色で文様が描かれ、天井や壁面や中国製と見られる金欄・銀欄・錦・緞子といった絹紋織物で装飾され、雲文を幡頭とする大小の幡が天井から吊るされる。

ウランバートルにあるガンダン・テクツェンリン寺は1727年に創建された仏教寺院で、巨大な観音像をはじめ150体を超える仏像が保存されたモンゴル仏教の総本山である。内部の宗教儀礼用品や仏像を装飾する文様は多彩で、収蔵される銀製香炉は、八吉祥と獅子頭文を中心に・雷文様・雲文・唐草文・七宝文などで装飾され、ダシボムバと呼ばれる銀製急須には龍文・無限結紐文が、銀製の燈明台にも八吉祥と唐草文様等が刻まれている。

ボグドハーン宮殿はモンゴル最後の君主ボグド・ハーンの「冬の宮殿」として知られる。数少ない宮殿建築には八吉祥をはじめ龍や獅子及び様々な装飾文様が結集されている。中でも調度品であるボグド・ハーンとその女王の玉座には、八吉祥をはじめ龍・馬・人物・花・果物・雲・唐草・ウルジーヘー、ハーンボゴイブチ・ハタンスイフなどが豪華絢爛に施されている。このようにモンゴルの寺院や宮殿建築から宗教儀礼用品、調度品にいたるまで、チベット仏教に由来する仏教関連の文様が浸透している。

一方、遊牧民の伝統的な住居、ゲルは、機能的な移動可能な構造である。筆者らが訪問したゲルをもとにその構造と装飾文様の一例を示す（図15）。ゲルは2本の柱と天窗「トーノ」を



図14 エルデネ・ゾー寺院（ウルブハンガイ県ハラホリン）  
建造物の一部（左）、上部装飾（右）、撮影：深津裕子，2022年7月9日



図15 伝統的移動式住居室内の装飾文様  
室内の中央部（左）、骨組み部分の雷文様・雲唐草文様、アルハンガイ県アルハンガイ（右）  
撮影：深津裕子，2022年7月8日

中心にした円型の骨組みからなる。天蓋に放射状に梁を渡し、壁面の骨格は菱格子状の木組みで構成し、外側を厚く丈夫な獣毛製のフェルトと布で覆ったゲル内部は直径4mから6m程度の居住空間となる。南に位置する扉から入り、中央上部の窓から天空に通じ、正面は神聖な神を祀る場所、左手（西）が男性、右手（東）が女性の場所となる。扉には無限結紐文様が刻印されることが多く、外装の縁には雷文様や雲文様が描かれる場合もある。柱や垂木は極彩色の雷文様や雲文様で装飾される。室内には同じく極彩色の文様で装飾された家具、敷物、寝台、クッション等があり、内壁は地域や部族特有の装飾文様を施した壁掛布で装飾される。その他日用品にはロシアや中国に由来

する文様が多くみられた。

遊牧民のテキスタイルは皮革・獣毛・フェルトが中心である。獣毛繊維を縮絨したフェルトは衣服をはじめ敷物や掛布、建築資材に活用された。テキスタイルの装飾は刺繍が中心で遊牧民族の手工芸として現代まで継承されてきた。中でもカザフ刺繍は工芸品として有名で観光資源としても活用されている。しかし本来は部族の伝統的な衣装の装飾やゲルの内壁を華やかに装飾するためのものであった。1992年頃作られたカザフの室内装飾用掛布（図16）は、菱繫文様を渦巻き・植物・花文様で埋め尽くしたデザインで、縁の数箇所に紐が縫い付けられた仕様でゲル内部の骨組みに結束し室内装飾として機能する。





図16 ゲル内装飾壁掛布（カザフ刺繍），技法：刺繍・ミシン縫製，材質：木綿・毛・麻・合成繊維，1992年制作の刺繍，個人蔵，撮影：深津裕子，2023年6月8日



図18 ゲルの扉を装飾する吉祥文様ウルジーヘー（上）と外塀を装飾するハタンスイフ（下），ウルブハンガイ県ハラホリン  
撮影：深津裕子，2022年7月8日



図17 ナードム祭典会場で天幕を加飾する文様，ウルブハンガイ県ハラホリン  
撮影：深津裕子，2022年7月8日

ゲル装飾に見られる無限結紐文、雷文、文字文、卍文などはシンプルな幾何学文様であるが故に、祝祭や生活の場において、より象徴的に力強く文様の存在を誇示していた。ハラホリンのナードム祭典会場に設置された青・赤・黄の天幕には、白布による無限結紐文・雷文・雲文等が切付けられ装飾されていた（図17）。また住居の扉や外塀にはゲル同様に無限結紐文、ハーンボゴイブチ、ハタンスイフ等の塗装が頻繁に見られた（図18）。このように宗教文化に起源をもつ吉祥文様はモンゴルの人々の信仰や祝祭の場だけでなく、日常生活にも深く浸透し、象徴的な文様として現代社会においても機能していた。



図18 デールで正装し騎乗するモンゴルの男性，ウルブハンガイ県ハラホリンの草原  
 撮影：深津裕子，2022年7月8日



図20 吉祥文様で装飾された馬具，ウルブハンガイ県ハラホリン  
 撮影：深津裕子，2022年7月8日



### 3.3 モンゴルの民族衣装と文様の変遷

江上は、遊牧民系の騎馬民族について「彼ら遊牧民の毛皮製、あるいはフェルト製の筒袖の上衣とズボン、耳まで覆う帽子や長靴は、いずれも騎馬と防寒に適した服装<sup>(50)</sup>と指摘し、装身具から武器類、車馬具類までの「器物をじつに豪華な金銀珠玉の装飾品で豊富に飾った<sup>(51)</sup>」と記す。ツルテムは、モンゴルには多くの民族衣装の種類と形式がありジェンダー・年齢・職種・用途により様々で、日常服は女性が制作し、特殊な鉄やブロンズの加工、鋳造加工、木彫、刻印、皮革装飾とアップリケ、特殊な縫製は男性職人が担い、革製品や銀製品の細工は秀逸である、という<sup>(52)</sup>。

騎馬民族の乗馬に適した機能的な仕様であるデールは左衽・立襟・長袖・長裾の長着で、高原での変化の激しい寒暖、強風、砂塵、虫から身を守り、保温保湿効果を重視した仕立てと言え

る(図19)。下には長いパンツとゴタル(ブーツ)を着用する。男性も女性もデールに合わせて特徴的な形状の被り物をつける。宝飾品は財産でもあり、日常的には銀製品、さらに金製品・珊瑚・トルコ石・翡翠などが加わる。多様な民族衣装の諸相については、1960年代にヤダムスレンが描いたハルハ・トルゲード・ブプリヤド・カザフ・サクチン・バルガ・ウズムチン・ダリガンガ・ウリアンカイ・コトン・ミンガト・ダルカ・オレット等の部族の民族衣装や装身具の絵画99点から明らかである<sup>(53)</sup>。男性はデール・被り物・ゴタル等に併せ、吊り紐付きナイフ・火打鎌・蒙古刀・煙草入・喫煙具一式などを携帯し、女性はデール・被り物・ゴタルの他に、頭飾り・髪飾り・首飾り・耳飾りを着装する。装束には地域の素材に加え中国や近隣諸国で製作された素材が取り込まれ、宝飾品の金や銀には吉祥文様や立体的な蔓草文様の細工が施され珊瑚・トルコ石をはじめ宝石で



図20 ナーダム会場での deel ファッション 6 種。ハラホリンとウランバートル。撮影：深津裕子、2022 年 7 月 8 日～10 日

加飾される。博物館資料に見られる民族衣装からは、地域特有の生地や制作技法に加え、交易により得られたロシアや中国及び近隣諸国製の素材を活用し部族のアイデンティティを可視化していたことがわかる。また、鞍・障泥・馬銜・腹帯・鞭などからなる馬具の皮革や銀製品の文様装飾も秀逸で、現代モンゴルの馬具にも蓮花・卍・雲・組紐文を散りばめた銀細工、無結紐文様が刻印された皮革が散見された（図20）。

現代モンゴルでは、deel が国を代表する民族衣装としてグローバルな進化を遂げていた。deel の特徴的な衣服形態を継承しながらも、近隣の中国やロシアをはじめ日本を含む地域の特徴的な生地やデザインが見られた。図20にモンゴルで取材した deel 6 種を示す。ウランバートル市内では旗袍のようなスタイルで正装する者が多く見られた。ハラホリンで乗馬する人々は伝統的かつ機能的な長袖・長い裾の deel を着用し、腰帯に鞭を吊し、懐に所持品を入れる様子が見られた。身体で露出させる部分は顔のみで、被り物・立襟・長袖・長裾・プールで身体を草原の環境から保護していた。伝統的な被り物を着用していたのは一部の人々に過ぎず、ほとんどが鍔のある帽子で代用していた。deel の生地は様々でシンプルな単色使いの生地からロシア由来の花柄文、中国由来の勇壮な龍文や円文、ソヨンボ文字、そして日本の飛鶴と菊丸紋まで多様である。その他日本の大島紬や留袖生地で作られた deel も販売されていた。このようにモンゴルの人々は、かつて遊牧系騎馬民族が高原を支配し、モンゴル帝国がヨーロッパから極東までをその支配下に置きながら統括したようなスケール感で、deel という民族固有の衣装形態に、異文化に由来する文様を取り込むグローバルな思考が窺えた。



図22 モンゴル国旗に表された「ソヨンボ」  
撮影：深津裕子、2023 年 6 月 8 日

### 3.4 モンゴル国旗と国章にみるソヨンボとヒイモリ

モンゴル草原で先史時代より遊牧民族の興亡が繰り返された後、13世紀初頭に形成されたモンゴル帝国が起源となり、1924年にモンゴル人民共和国が宣言され、1992年にモンゴル国が誕生し、現在に至る。その国旗と国章にはソヨンボが表される（図22）。国旗の左側、幾何学形態で、炎、太陽と月を示す円と三日月、大地に向かう矢と槍を示す三角形、大地を示す長方形、陰陽を表す卍で構成されるのがソヨンボである。モンゴル人民共和国（1924-92）の時代にはソヨンボの頂点に星文様が配されていた。また、1992年より使用されるモンゴル国章も特徴的な文様で構成される。中央に配されたヒイモリと呼ばれる天馬とソヨンボ、上方には三宝、下方には大地とハダクを携えた法輪、円型の縁には卍と雷文の連続文が連なり、それらを白い蓮花台座が支える。

このようにモンゴルの世界観そのものがソヨンボやヒイモリに象徴され、ナショナル・アイデンティティとなっている。モンゴルはまさに文様の帝国なのである。

#### 4. 北方ユーラシアを巡るメアンダー文様について

私が担当した映像作品は、文様をユーラシア大陸とその周辺という位置づけで眺めた場合に見えてくる遥かな連なりをテーマにしている。文様の歴史は複雑で、その始まりは文字の発明以前の時代に遡るため、国境や文化を越えた連りの間に、明確な関係性を描くことは難しい。しかし時と場所を越えて出現するパターンには、何らかの意味が込められている場合もあるだろう。

たとえば1992年に制定されたモンゴル国の国章を見てみよう。国章は国家の象徴としてデザインされる紋章や徽章なので、色彩だけでなく動植物など具体的なモチーフが組み合わされることが多い。モンゴルの人びとが崇めてきた大空を表す青があり、そこにモンゴルを象徴するソヨンボと組み合わせられた天馬が配置されている。上方にある三宝は仏教を表しており、その全体をいわゆる雷文がぐるりと取り囲んでいる。

モンゴルでは「tumen nasan」と呼ばれる雷文は、国章に使われているくらいだから、日常的にさまざまところで目にする文様である。首都ウランバートルではモダン建築をはじめ、民族衣装のデールや軍服の縁取り、ゲルや祝祭用のテントから日用の食器にいたるまで、衣食住すべての場面に現れている。雷文はヨーロッパではギリシア雷文、あるいはメアンダー文と呼ばれ、ギリシア・ローマ時代に遡る古い文様の代表である。おそらくモンゴルの人びとにとって、意識に上らないほど遍在している文様だろう。この遍在性に注目して、それが氷河時代のユーラシアで出現し、旧石器から新石器さらに歴史時代まで生き延びてきたところに注目するのが、この映像作品である。

北海道への玄関口、新千歳空港から車で小一時間のところに、キウス周堤墓群と呼ばれる縄文時代後期の遺跡がある。千歳市の中心から東におよそ9キロの距離にある馬追丘陵の斜面に複数の墓が点在している。環状に盛り土をし、なかに複数の墓を据えたことから「周堤墓群」と呼ばれ、調査の結果、縄文後期の集団墓地であることが明らかになっている。キウス周堤墓群は世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」のひとつだが、そのパンフレットには、それぞれの史跡を象徴するロゴが使われている。キウス周堤墓群のそれは墓から見つかった、石棒の文様を図案化したものである。石棒は長さ57センチ、重さ710グラムで、粘板岩を丁寧に磨いて作られたもので、約3200年前の縄文時代後期の制作と推定されている（図23）。

縄文時代中期の華麗な土器に比較すれば、石棒は地味な存在かもしれない。だがキウス周堤墓群の石棒は仕上げが精巧であることに加えて、先端に繊細な曲線で刻まれた装飾が見事であ



図23 キウス周堤墓群出土の石棒の頭部、千歳市埋蔵文化財センター蔵



図24 ウクライナ、メジン遺跡出土のマンモスの牙製腕輪

り、芸術的な志向を感じさせる。文様は両端で異なっていて、そのひとつを図案化したものがキウス周堤墓群のパンフレット表紙に使用されている。実物の曲線部分を直線化したデザインは、雷文にほかならない。古代の制作者が、石の棒に雷文を彫ろうとしたのかどうかは不明だが、先史時代に刻まれたジグザグの曲線は、現代のデザイナーの目には、雷文に分類されるに十分な出来栄であったことになる。

先端に刻まれた線刻は、あらためて縄文時代が、「文様の文明」と呼ぶにふさわしい、素晴らしいデザインセンスに彩られ

た時代だったことを認識させる。おそらく北海道でもっとも有名な土偶にも見られるセンスである。函館市著保内野遺跡出土の、全国的に有名になった中空土偶である。南茅部の「茅」と、中空土偶の「空」をとって「茅空（かっくう）」のニックネームで知られるこの土偶は、縄文時代後期後半の作品で、全体のバランスと技術的な完成度は比類がない。

全身に施されている文様は「三叉状入組文」と呼ばれるが、身体の曲線にあわせて詭えられたような曲線は、ある種の衣服のようにも見える。モンゴル相撲の力士が身にまとう上半身と下半身、そして脚部を覆うユニフォームを彷彿とさせるが、時代は3500年前である。当時このような入れ墨が存在していたのかもしれないし、何らかの祭祀に使われたのかもしれないが、すべては想像の域を出るものではない。

映像の後半に登場するのは、人類最古のメアンダー文と考えられている腕輪である。現ウクライナ北部のチェルニヒフ州のメジン村近郊の遺跡から発見され、メジン遺跡の装飾品として考古学的によく知られたもので、マンモスの牙の表面に繊細な刻み目を入れ、波目と雷文を左右対称にしたデザインである(図24)。旧石器時代の紀元前1万3000年頃に作られたものが、ほぼ完全な形で残されていることは驚異であるが、同じメジン遺跡からは、やはりマンモスの牙で作られた鳥型の彫刻に、卍を練刻したものが見つまっている。卍を連続すればメアンダー文となるが、おそらく両者は同じデザインセンスを持った集団によって作られたものであろう。ちなみにウクライナの旧石器時代ではマンモスの牙を利用して作られた住居跡が発掘されている。

神話学者のジョーゼフ・キャンベルは、メジンの腕輪と彫刻について、それらがショーヴェ洞窟やラスコー洞窟で知られるような、洞窟壁画とは異なるスタイルではないかと指摘している<sup>(54)</sup>。そしてそのような異なるスタイルと神話を生んだ文化の中心地が、ドニエプル川とドン川に挟まれた地域にあり、その特徴は幾何学的なスタイルにあるとしている。それが雷文でありメアンダー文である。氷河時代に誕生し、新石器時代から歴史時代を経て、現在のユーラシアにおいても用い続けられている、驚くべき生命力をもった文様だと言える。キャンベルの指摘を敷衍するならば、その幾何学的なスタイルはモンゴルのみならず、日本でも独自の発展を見せている。アイヌの人びとが創造する文様に見られる幾何学的な構成や左右対称性には、超長期的なデザインセンスが息づいているのかもしれない。

## 5. モンゴルのサウンド——〈倍音〉という文様

民族や文化に特有の文様を解読し、視覚的パターンや図像から特定の秩序や法則を分析することは、その文化を支える自然観や宗教観、世界認識のありかたを理解することにつながる。同じことは音楽にも言える。音楽は階層化された聴覚のデザインだが、それぞれの階層を文様という視点から解読すれば、その文化の特徴を抽出することができる。音楽を奏でる楽器や歌声の音色は、文様にたとえれば素材や色彩そのものにあたる。特定の音を選んで構成される音階や旋法は、文様における直線や曲線、円や多角形のような基本要素だ。反復されるリズムパターンは、縞や格子などの増殖する幾何学模様に近い。時に自然現象を模倣し、神話や物語を伝承し、共同体のアイデンティティを象徴する機能においても、音楽と文様には共通点が多い。

モンゴルの音楽についても、リズムや音階、旋律などの様々な要素を文様として考察することが可能だ。最も基本的な要素、音響＝音色に着目してみよう。もちろんモンゴル音楽と言っても、宗教儀礼の音楽から、遊牧民や共同体に伝承されてきた音楽、広く親しまれている大衆歌謡、近年大流行のモンゴル語ロックやヒップホップ、さらにはシャーマンの朗誦まで幅広い。いずれにしても圧倒的な割合を占めるのが〈声〉だ。文化人類学者の島村一平(1969-)は、伝統的な歌唱からラップまで、モンゴルで〈声〉が重視される理由を、口承文芸の伝統と関連づけて次のように述べている。

そもそも移動生活をする遊牧民にとって、重たい紙の本という外付けハードディスクを保管するより、頭の中で記憶する口承文芸のほうが性に<sup>(55)</sup>あっていた。

モンゴルに伝わる〈声〉の中でも、伝統的な歌唱法として広く知られるのがオルティンドー(Urtynduu 長い歌)とボグインドー(boginduu 短い歌)だ。前者は拍節のない自由なリズムで、細かい装飾音やコブシを交えながら朗々と歌い上げる。後者は拍節リズムに乗って定旋律を反復する。

これらの歌はいずれも東部で盛んだが、西部で盛んなホーミー(khoomii 喉歌)は、まったく別種の歌唱スタイルだ。隣のトゥヴァ共和国などアルタイ山脈一帯に伝承されてきたこの歌唱法は、ダミ声のような低声を伸ばしながら、高音域の旋律も同時に鳴らす特殊な技法だ。喉歌の演奏家、嵯峨治彦(1971-)は、その原理を次のように解説している。

人間の声や楽器の音は、その基本周波数を持つ音といくつもの倍音(基本周波数の整数倍の周波数を持つ音)の重ね合わせで出来ている。発声中に、舌や唇の位置や形を調整して口腔内のサイズをいずれかの倍音の波長と一致させると、その倍音は共鳴して音量が増加し、地声+共鳴倍音の

『二つ』の音が認識される。<sup>(56)</sup>

ホーミーの歌唱を伴奏する主な楽器にトブシュール (tovshuur) がある。馬の毛や羊の腸を材料とする弦を、指で弾いたりかき鳴らす撥弦楽器だ。あるいはモリンホール (morin khuur 馬頭琴) が用いられる場合もある。独奏楽器としても、民謡や舞踊の伴奏にも、近年はロックバンドのリード楽器にまで使われる、モンゴルのシンボルとも言える擦弦楽器だ。馬頭を模したネック部分が特徴的で、馬の尾毛を束ねた2本の弦を同じく尾毛を張った弓で弾く。

興味深いのは音色だ。その形態は西洋楽器のチェロを連想させるものの、チェロとは異なった独特の鳴り方をする。ここではFFT (高速フーリエ変換) ソフト<sup>(57)</sup>を用い、同じ音程で鳴らしたチェロとモリンホールの音源を、周波数スペクトルで比較してみる (図25②③)。チェロは基本周波数とその第1倍音が最も大きく、明瞭な中音域の整数次倍音がそれに続く。高音域に分布する非整数次倍音は、さほど大きくない。一方モリンホールの場合、中音域の整数次倍音はチェロのように小さく、むしろ高音域で広い範囲の非整数次倍音が大きく鳴っている。

耳で聴くと主観的には、チェロは音程感が明瞭で澄んだシングルな音、モリンホールはザラザラと耳障りのある複雑な音色という印象を受ける。ここで、ホーミーの発音原理を思い出そう。基本周波数に加え、高域の倍音でもう一つの旋律を生み出すホーミーの歌唱もまた、きわめて耳障りのあるダミ声のような音色だった。これも周波数を分析すると、高域を含む全音域に不規則な非整数次倍音が発生していることがわかる (図27)。

モンゴル音楽に多用される他の楽器、たとえば口に当てて指で弾き口腔内で共鳴させるヘルホール (Khel khuur 口琴) も、ピンピンとノイズなサウンドを発する。この楽器も高音域に非整数次倍音が豊富だ (図28)。これらの周波数グラフを視覚的な画像にとらえると、発音原理はまったくちがう楽器や声なのに、よく似た〈音の文様〉に見えてくる。

なぜこうした共通の〈文様〉が好まれるのだろうか。考えられるのが、風土の影響だ。音楽学者の藤井知昭 (1932-) は、次のように指摘している。

人間集団をとりまく環境と音楽との関係は、楽器の材質をはじめ、声の出し方など音楽的諸要素にもさまざまな影響をあたえている。<sup>(58)</sup>

モンゴルの国土の大半は、砂漠や草原だ。こうした環境では声を発しても音を鳴らしても、地平線に散っていくだけで残響が残らない。移動式住居ゲルの中でも、音は壁や天井のフェルトに吸い込まれて反響しない。このように極端な音響環境で、他人に音を伝えたり自分の音を聞きとるには、残響が豊富で音

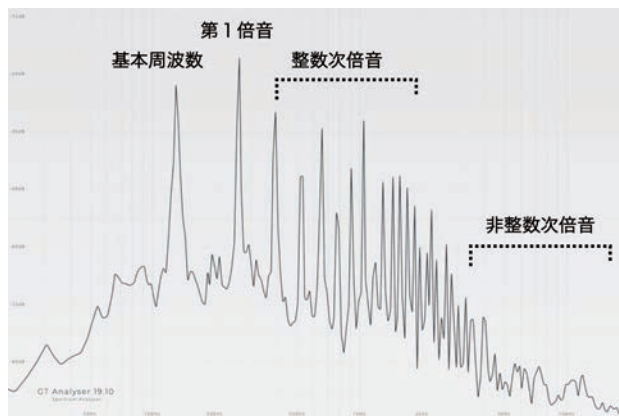


図25 チェロの周波数スペクトル

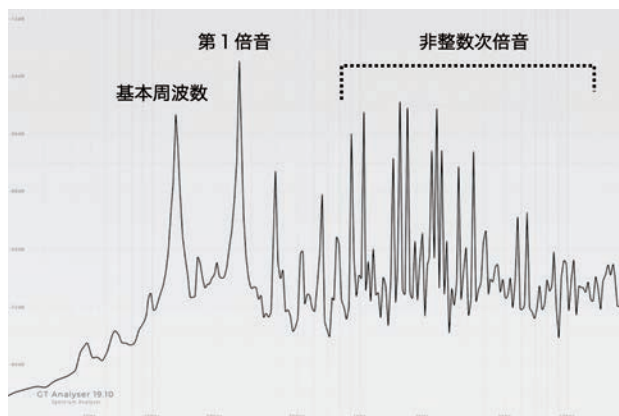


図26 モリンホールの周波数スペクトル

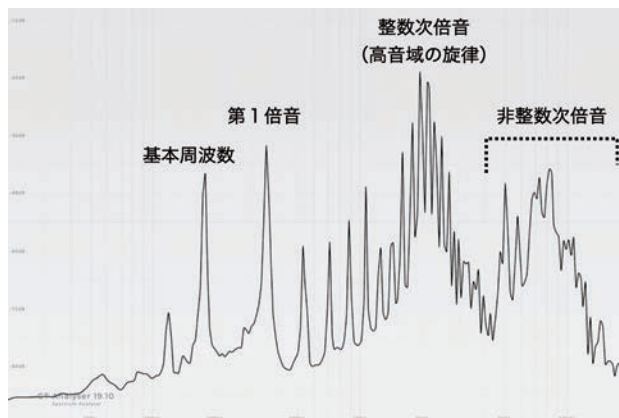


図27 ホーミーの周波数スペクトル

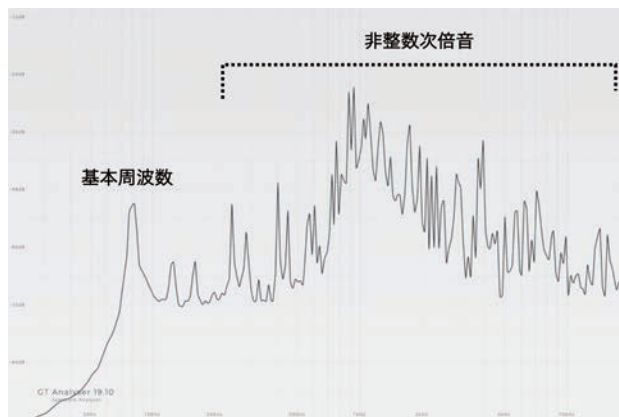


図28 ヘルホールの周波数スペクトル

を聴き取りやすい空間とは異なるアプローチが必要となる。

一つの手がかりはヒューマン・エコーロケーションだ。盲人や目隠しをされた人が、コウモリやイルカなどの動物と同じように、自分の発した音の反射を聴いて障害物や状況を知覚する技術である。音の物理的性質として、障害物が大きければ低い周波数も反射するが、小さな障害物は高い周波数しか反射しない。そのため、周囲を確認しようとする人が発するのは、チツという舌打ちやシーツという摩擦音が多いという実験結果がある。<sup>(59)</sup> 障害物のない広い空間で、ホーミーやモリンホールのように高域の非整数次倍音を多く含む音が好まれるのは、こうした事実と一致する。

〈音の文様〉は、長い時間を経て風土に最適化してきたこのような音楽文化の一面を、雄弁に伝えてくれる。

## 6. モンゴルの吉祥文様

モンゴルはシルクロードや海洋流通に関連するアジアの文化圏とは異なる北方アジアに位置する。チンギズ・カン（1162–1227）の時代には騎馬の機動力で大陸世界を席卷し、その地域的特異性は文化及び文様表象においても特異な歴史を成立させた。日本から見ればアジアの極西に位置するモンゴルだが、その先にはロシアさらに欧州圏が連なる、もっともヨーロッパに近いアジアである。旧ソ連邦の社会主義文化圏の主要国で、1924年に独立したモンゴル人民共和国は、その後70年間ソ連の衛星国としてソ連の政策に追従した。その時代には多くの仏教寺院が取り壊され、言語や文字文化でもソ連の影響を色濃く受けた。しかしそのような歴史にも関わらず、装飾的な文様においてはヨーロッパや旧ソ連（ロシア）の影響を強く感じることはない。モンゴルの装飾文様を調査して、何より興味深かったのはアジア的特性である。

本章では、現地調査による文様収集を中心に、モンゴルの吉祥文様の独自性及び異文化との関連性、文様の風土と環境的要因について考察しながら、モンゴル独自の宗教的思想により培われてきた文様の諸相を検証する。

### 6.1 多様な吉祥文様

吉祥文様とは縁起がよいとされる動植物や物を描いた図柄で、世界各地でそれぞれの文化に基づき成立している。吉祥文様は晴れ着や慶事などの調度品にあしらわれるだけでなく、一般的に生活全般で普段使いの品においても用いられる。その一方で王侯貴族の衣服や調度品さらに王宮を装飾するモチーフとして古くから世界中でその例を見ることができる。中国で皇帝のシンボルとされる龍などをその類型とするのであれば、吉祥文様の範疇はかなり広範囲な要素になると考えられる。唐草文様など世界的に普及したものもあるが、とりわけ東アジアでは多くの吉祥文様が頻繁に流用されヴァリエーションも豊富である。



図29 モンゴル調査で収集した吉祥文様、上から  
a. 中央スタジアムの入口に取り付けられたハタンスイフ文様、  
b. 寺院扉の吉祥文様（法輪・宝石・三鉈杵・卍・蝙蝠・双魚）、  
c. 橋の親柱に添えられたウルジーヘー文様、  
d. ボグドハーン宮殿の建造物全体を覆う吉祥文様、ウランバートル、撮影：佐々木成明、2022年7月8日

モンゴルでは多くの吉祥文様が衣装や調度品など生活全般で現代も用いられている。ウランバートル市内の建造物装飾、橋の両端に設けられた親柱の装飾、寺院の門や扉を含む建築装飾、移動式住居ゲルの装飾などから数々の吉祥文様を収集することができた（図29）<sup>(60)</sup>。

## 6.2 モンゴルの代表的な吉祥文様

アジア全域で知られる八吉祥の文様を含め、モンゴルで用いられてきた代表的な吉祥文様について概説する。ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教では、八つの文様を神聖な組合せと捉え崇拝の対象としてきた<sup>(61)</sup>。仏教では釈迦が悟りを得た直後に緒天部によって釈迦に捧げられた八つの供物を象徴し、八宝、吉祥八宝、八吉祥紋とも呼ばれ、本尊として信仰の対象とされた。モンゴルの仏教は八吉祥を崇拝の対象とするチベット仏教の影響を多大に受けていることから、八吉祥文様がゲルや寺院等の建造物装飾、生活の場やTシャツを含む衣類など現代的な装いにも見られる(図30)。

現地調査で収集した八吉祥文様を図31に示す。エンドレス・ノット、吉祥紐と呼ばれる無限結紐文様はモンゴルでウルジーヘーと呼ばれる。勝幢あるいは戦旗は仏陀が驕り、欲望、悪感情、死への恐怖などに打ち克って悟りを開いたことを象徴し、チベットでは僧院や寺院の屋根に銅鍍金で作られた勝幢が四隅に配される。宝傘あるいは天蓋は、仏や高貴な人に手向けられる安らぎを与える道具である。仏教においては災難や病氣から人間を守るもの、あるいは仏法を保護するものを表し、空間の拡がりや天空の聖なる空気を象徴することもある。法輪またはダルマチャクラは釈迦及び仏法を表すシンボルで、モンゴルの寺院の壁面や扉及び屋根に見られる。宝瓶または宝壺は、健康や長寿、富貴、繁栄、智慧、宇宙空間や仏法の教えの深さを象徴する。蓮華は泥水にまみれず水面上に開花するさまから欲望の汚濁に浮かぶ仏の身の純粹さを象徴する。法螺貝は、美、深淵、妙なる調べを象徴し真理の音を奏で、インド・ヒンドゥーではヴィシュヌ神の主要なシンボルの一つである。双魚は水中を自在に泳ぐ様子から、解脱、堅固、活発を表し、インドでは聖なる二つの大河を象徴する<sup>(62)</sup>。

その他モンゴルで見られる吉祥文様を図32から図39までに示す。モンゴルの国旗と国章に表された文様にソヨンボと天馬ヒイモリがあり、3.4に記述された通りである(図22)。

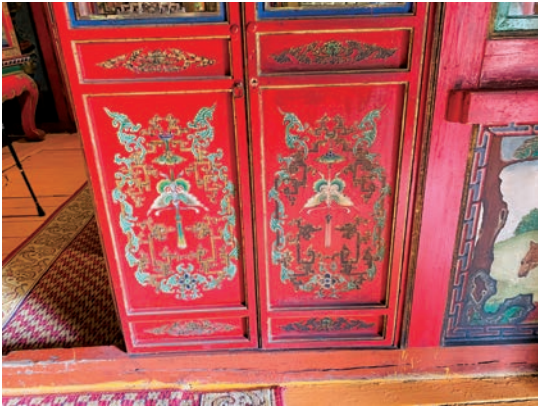


図30 ソヨンボが描かれたTシャツ、ハラホリン近郊、撮影：佐々木成明、2022年7月8日



図31 モンゴルの八吉祥文様、上から  
 a. ゲルの扉に描かれた「ウルジーヘー」、ハラホリン、撮影：佐々木成明、2022年7月8日  
 b. 「宝傘」が描かれた寺院扉、ウランバートル、撮影：ヲノサトル、2022年7月7日  
 c. 「宝瓶」が描かれた寺院の扉、ウランバートル、写真：佐々木成明、2022年7月7日  
 d. 寺院の壁面に描かれた「法螺貝」、チョイジンラマ寺院博物館、ウランバートル、撮影：勝又公仁彦、2022年8月1日





- e. ボグドハーン宮殿の扉に描かれた「勝幢」あるいは「戦旗」。  
ウランバートル，撮影：佐々木成明，2022年7月7日
- f. エレデネ・ゾー寺院の屋根上に取り付けられている「法輪」  
または「ダルマチャクラ」，ハラホリン，撮影：佐々木成明，  
2022年7月8日
- g. 寺院の壁面に描かれた「蓮華」，チョイジンラマ寺院博物館，  
ウランバートル，撮影：勝又公仁彦，2022年8月1日
- h. 寺院の壁面に描かれた「双魚」，チョイジンラマ寺院博物館，  
ウランバートル，撮影：勝又公仁彦，2022年8月1日

ブンチュークはトゥグ、クラスとも呼ばれる毛槍を指し、モンゴル紙幣にも見られる（図33）。これは金属製の竿の先端に馬あるいは犛牛の尻尾を付けて掲げたもので、13世紀から東アジア、中東、東欧において政治や軍事の印として用いられ、日本の馬印に相当する<sup>(62)</sup>。ブンチュークの原型はモンゴルで部族を率いる大将のシンボルであり、モンゴル帝国ではテリーン・トゥグと称する9本のトゥグがチンギス・カンの権力と帝国の象徴であった。ブンチュークは、現在もモンゴル軍の象徴とされる武器であるが、その形状は八吉祥の勝幢や宝傘と類似するように思える。仏教用語で7つの宝（金・銀・水晶・瑠璃・瑪瑙・珊瑚・蝦蛄）を意味する七宝文様あるいは七宝繫文様は、モンゴルの寺院をはじめとする建築装飾に見られる（図29d、図32）。ノルブは、金、銀、真珠、珊瑚、琥珀等に由来する文様で、宗教儀礼用品をはじめ調度品にも見られる（図34）。

次に、モンゴルの特徴的な文様のうち幾何学的な文様について述べる。アルハンヘーは雷文様及びメアンダー文様に相当し、3.2、4.に記述された通りである（図35）。ハーンボゴイブチ（図18右）は二つの円が連なり、ハタンスイフ（図36）は菱形2つが連なる文様で、その幾何学形態が腕輪と耳飾りに類似することから王の腕輪、王妃の耳飾りとも呼ばれる。ハス・ヨンドンヘー（図37）は、卍の形状で、サンスクリット語のスワステイカに類似する。モンゴルでは北斗星を取り囲むおおぐま座の移動によって天空の真ん中に描かれるのが卍の形とされ、吉祥文様であると同時に世界の中心を表すシンボルと捉えられている<sup>(58)</sup>。ポージンヘー（図38）は、「寿」という漢字を文様化した文字文様で周りに施される蝙蝠の図像と共に中国の影響を受けた文様であろう。ポージンヘーは、ウルジーヘーやアルハンヘーとの関連性が窺われる<sup>(63)</sup>。その他モンゴルでは、法具である三鈷杵の形状が図案化されたものをトルイと呼び、類似するものにスルデと呼ばれる三つ又の鏝の形をした文様がある（図39）。この三つ又鏝は前述した軍旗の先端にも見られ、モンゴル帝国の強さと霊的な尊厳を継承すると推測する<sup>(64)</sup>。

## 7. 総括

本稿では、モンゴルの装飾文様を中心に西はウクライナ、北方ユーラシアから東は日本のオホーツク文化、縄文、アイヌの文様までを考察し、先史時代から現代までの文様の発生と展開の変遷過程を複数のメディアを活用しながら検証した。研究の手法として文様データベース、映像作品、自動生成アプリケーションなどを活用し、制作物を集約した文様アーカイヴは、アートやデザイン領域において創造力を支援するようなツールとなりうることが示唆された。本研究では、ヴィジュアルイメージを主体とし、複合的なメディアを活用した研究手法によりアーカイヴを構築することで、文様＝デザインから文化や人を知る研究が実践できる可能性を検証した。筆者らの考察をまとめ、以下のように総括した。

- (1) モンゴル帝国の成立以前から存在した遊牧民系の騎馬民族らが残した遺跡・岩絵・古墳には最も土着的で固有性の強い文様が見られる。
- (2) モンゴルの寺院建築に見られるチベット仏教の影響から展開した宗教的な装飾文様には吉祥文様が多く、遊牧民の文化にも浸透し特徴的な幾何学文様として現代社会にも継承されている。
- (3) モンゴルの現代社会における国家やグローバリズムを象徴する幾何学的な文様は複合的で多様性に富み国旗や国章に象徴されている。
- (4) アルハンヘー・雷文様・メアンダー文様と称される幾何学文様は、モンゴル、北ユーラシア大陸や日本のアイヌや縄文文化において独自の発展を遂げたが、その幾何学的な構成や左右対称性は普遍的なものである。
- (5) モンゴルの音楽に用いられる楽器や声の音響的な特徴は、国土の大半を占める砂漠や草原といった風土や、ゲルのような居住空間の特質を反映している。
- (6) 地域の特徴的な装飾文様のうち、幾何学文様には文化の固有性だけでなく、デザイン的な普遍性が内在する。

## 謝辞

本稿は公益財団法人三島海雲記念財団 2021 年度学術研究奨励金（人文科学部門）「モンゴル装飾文様アーカイヴの創造—北方モンゴロイドから縄文・アイヌ文様へ—」の成果の一部である。本研究には筆者らに加え、伊藤俊治（本学客員教授・東京藝術大学名誉教授）、勝又公仁彦（本学非常勤講師・京都芸術大学准教授）と、外部有識者として、降幡真（降幡建築事務所代表取締役社長、建築家）が参加した。

筆者らがモンゴルの文様研究に着手し始めた頃、三島海雲記念財団の設立者で「カルピスの生みの親」である三島海雲（1878-1974）が、内モンゴルでカルピスの原点となった酸乳と

出会ったことを知った。そして本学の前身、多摩帝国美術学校の初代校長で、新進気鋭のデザイナーであった杉浦非水（1876-1965）は、1919年にカルピスのポスターのデザインを手がけていた。モンゴルの文様研究が「多摩美術大学」、「杉浦非水」、「カルピス」、「三島海雲」と時代を遡るようにつながり、三島海雲記念財団からの研究奨励金で研究を実現し成果報告ができたことに、深く感謝する。



図62 「菱形の星を取り囲む円」の七宝文様、スフバートル広場、付近の建造物壁面、ウランバートル、撮影：深津裕子、2022年7月10日



図63 モンゴルの20000トゥグルグ紙幣に描かれた「ブンチューク」



図64 馬の鞍上に配された「ノルブ」(調度品の部分)、ウランバートル、撮影：佐々木成明、2022年7月10日



図65 ゲルの外装に連なる「アルハンヘー」(ゲル模型)、モンゴル製、撮影：佐々木成明、2022年7月10日



図66 公共施設の鉄柵に取り付けられた「ハタンスイフ」、ウランバートル、撮影：佐々木成明、2022年7月10日



図67 プラスチックバッグに印刷された「ハス・ヨンドンヘー」、ハラホリン近郊、撮影：佐々木成明、2022年7月8日



図68 「寿」に由来する文字文様「ボージンヘー」、ボグドハーン宮殿、ウランバートル、撮影：佐々木成明、2022年7月7日



図69 ナーダム会場の天幕を装飾する「スルデ」と雲文様、ハラホリン近郊、撮影：佐々木成明、2022年7月8日

## 註

- (1) 1974 年度科研費 X0080-945036 一般研究 (B) 「文様の発生及び展開に関する総合研究」研究代表者：山辺知行
- (2) 佐々木静一、田澤年美、大淵武美他「文様研究報告書 I 日光東照宮建造物装飾文様調査報告書」多摩美術大学文様研究所 (1974)
- (3) 2017-2019 年度多摩美術大学共同研究「アジアの装飾文様のアーカイブス化と教育活用に関する研究」多摩美術大学、山形季央・深津裕子・佐々木成明・伊藤俊治
- (4) 2019-2020 年度学術振興資金「日本とアジアの群島を結ぶ文様研究」、私学事業団、深津裕子・佐々木成明・伊藤俊治
- (5) 2021-2023 年度科学研究費基盤研究 (B) (一般) 21H03767 「日本の文様デザインアーカイブの創造——東西文化交流と近代日本のデザインの視座から」深津裕子・佐々木成明・ヲノサトル・伊藤俊治・勝又公仁彦
- (6) 2021-2023 年度科学研究費国際共同研究加速基金 (海外共同研究強化 (B)) 21KK0002 「台湾の文様デザインアーカイブの創造——アジアの少数民族文化の固有性の記録」深津裕子・港千尋・佐々木成明・ヲノサトル・伊藤俊治・勝又公仁彦
- (7) 山形季央・深津裕子・佐々木成明・伊藤俊治「アジアの装飾文様のアーカイブス化と教育活用に関する研究」『多摩美術大学研究紀要』第 33 号、2018 年、163-171 頁。
- (8) 山形季央・深津裕子・佐々木成明・伊藤俊治「アジアの装飾文様のアーカイブス化と教育活用に関する研究から日本とアジアの群島を結ぶ文様研究へ」『多摩美術大学研究紀要』第 34 号、2019 年、147-162 頁。
- (9) 文様映画インドネシアバリ島編 10 作品《01 チリとラマーバリ島の想像力を揺るがす不思議な文様》、《02 チェブクイーカット文様に宿る魔除けの力》、《03 ポレンーバリ島の世界観を表す守りの文様》、《04 グリンシン—聖なる文様》、《05 オムとオンカラ—聖水と身振り》、《06 ワヤンクリットとカヨーン—影と闇の文様》、《07 ナーガー—再生と生命力のシンボル》、《08 カーラと唐草—バリの石彫装飾》、《09 パティッカー—植物の文様》、《10 パロン—森の聖獣文様》(2017-2019)、日本・資生堂唐草編 2 作品《資生堂唐草と美の生命力》、《資生堂唐草と山名文夫》、中東及びイスラムの美術編 1 作品《イスラム教のモスク—文様による祈りの空間とムカルナスの造形》<https://tamabiac.jp/research/tamamon22/cinema.html> (最終閲覧 2023 年 7 月 10 日)。
- (10) 「新世紀アジアの潮流—文様の創造力」展、多摩美術大学アートテークギャラリー、2019 年 11 月 20 日～2019 年 11 月 22 日。
- (11) 深津裕子、佐々木成明、伊藤俊治「熱帯文様論——インドネシア諸島の文様を中心に」『多摩美術大学研究紀要』第 35 号、多摩美術大学、2021 年、149-161 頁。
- (12) 深津裕子、伊藤俊治「杉浦非水のデザイナーアーカイブの想像——近代日本の文様と東西交流の視座から」『多摩美術大学研究紀要』第 36 号、多摩美術大学、2022 年、81-99 頁。
- (13) 深津裕子、伊藤俊治「資生堂唐草から辿る日本の蔓草文様装飾の諸相」『多摩美術大学研究紀要』第 36 号、多摩美術大学、2022 年、125-140 頁。
- (14) <https://tamabiac.jp/research/tamamon22/index.html> (最終閲覧 2023 年 8 月 14 日)。
- (15) 江上波夫『騎馬民族国家 日本古代史へのアプローチ 改版』中公新書 147、東京、2020 年。
- (16) N. ツルテム他『モンゴル曼荼羅』1-4 巻、新人物往來社、東京、1990 年。
- (17) Yadamsuren, U., Sodnom, B., *National Costumes of M. P. R.* State Publishing House, Urambartor, 1967.
- (18) 宮脇淳子『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房、東京、2007 年。
- (19) 深津裕子「メディウムとしてのアートアーカイブ第二部アートアーカイブと遠隔教育、事例報告 2 文様アーカイブとアート&デザイン教育」『軌跡』第 3 号、多摩美術大学アートアーカイブセンター、2021 年、59-62 頁。
- (20) 深津裕子「文様の創造力—多摩美術大学における文様研究の系譜」多摩美術大学アートアーカイブセンター、2021 年、100-102 頁。
- (21) Fukatsu, Y., *The Creative Possibilities of Monyo: Tracing Monyo Research at Tama Art University*. Art Archive Center at Tama Art University, 2022, pp.56-61.
- (22) <https://www2.tamabiac.jp/iaa/about-iaad/> (最終閲覧 2023 年 8 月 14 日)。
- (23) 深津裕子 (代表研究者、多摩美術大学美術学部教授)、伊藤俊治 (多摩美術大学美術学部客員教授)、港千尋 (多摩美術大学美術学部教授)、佐々木成明 (多摩美術大学美術学部教授)、ヲノサトル (多摩美術大学美術学部教授)、勝又公仁彦 (多摩美術大学美術学部非常勤講師)、降幡真 (外部有識者・建築家・降幡建築設計事務所代表取締役社長)
- (24) 研究領域の分担は、深津が服飾、伊藤が美術・写真、港が芸術人類学・写真、佐々木が映像、ヲノが音楽、勝又が美術・写真、外部有識者の降幡が建築である。
- (25) [https://tamabiac.jp/research/tamamon22/Mongolian-project\\_Ainu\\_Jomon/MpAJ\\_index.html](https://tamabiac.jp/research/tamamon22/Mongolian-project_Ainu_Jomon/MpAJ_index.html) (最終閲覧 2023 年 8 月 14 日)。
- (26) 企画・制作：佐々木成明、プログラミング補助：林宏香、データベース作成補助：横瀬愛、テキスト作成：深津裕子
- (27) 学術研究成果報告会《モンゴルの文様》開催日：2022 年 11 月 26 日、会場：多摩美術大学 TUB (東京)、主催：TAMA MON 22 多摩美術大学文様研究プロジェクト
- (28) 第 59 回三島海雲記念財団学術研究奨励金成果報告展《モンゴル 文様の帝国》会期：2023 年 6 月 7 日～2023 年 6 月 14 日、会場：多摩美術大学八王子キャンパスアートテークギャラリー 2 階、主催：TAMA MON 22 多摩美術大学文様研究プロジェクト
- (29) 外部有識者・建築家・降幡建築設計事務所代表取締役社長
- (30) 多摩美術大学美術学部情報デザイン学科メディア芸術コース非常勤講師 (2023 年 3 月現在)
- (31) 多摩美術大学美術学部情報デザイン学科メディア芸術コース 4 年 (2023 年 8 月現在)
- (32) 多摩美術大学美術学部情報デザイン学科メディア芸術コース 2 年 (2023 年 8 月現在)
- (33) ブリタニカ国際大百科事典小項目事典「メアンダー文」より。
- (34) 北海道大学大学院博士後期課程 (2023 年 8 月現在)
- (35) 川上裕子のチセは現在、にも倶楽部 (横山信代表) の敷地内にある。
- (36) 企画・制作：佐々木成明、プログラミング：堀口淳史  
【開発環境】ハードウェア環境：MacBook Pro 13-inch, 2020, Four Thunderbolt 3 ports OS 環境：macOS 12. x~13.4.1 IDE：Xcode 13.4~14.3.1 開発言語：Objective-C  
フレームワーク：Cocoa 【推奨動作環境】ハードウェア環境：メモリ 8GB 以上/Retina ディスプレイ OS 環境：macOS 10.14
- (37) 港千尋《メアンダー文様、起源への旅》、勝又公仁彦《5 Days-Mongolia》。
- (38) モンゴル NAAD 社製ゲル模型 NAAD M30 Nomadic Ger. 寸法：30×30×15cm。素材：プラスチック、羊毛フェルト、布、紙。本製品は模型を組立てながらゲルの構造や伝統的な家具や小物の配置を学習することができる。
- (39) Yadamsuren, U., Sodnom, B., *op. cit.*
- (40) アイヌ刺繍家川上裕子制作・所蔵の服飾・装身具を展示。
- (41) 建築とその装飾文様については本研究に参加した外部有識者で建築家の降幡真が考察した。
- (42) 正式登録名は、Petroglyphic Complexes of the Mongolian Altai で、内容はユネスコ世界遺産ファイルに基づく。<https://whc.unesco.org/en/list/1382/documents/%23ABevaluation> (最終閲覧 2023 年 8 月 14 日)。
- (43) Batbold Natsag, *Hunting scene*. Turkic period ©Institute of Archaeology,

Mongolian Academy of Science. 2008.

- (44) 江上、前掲書、23 頁。
- (45) 事例として黄金の鹿型飾板（南露ケーバン河流域出土、紀元前 6 世紀）、鳥獸格闘文様が施された革製鞍覆（アルタイ地方パバジルク古墳出土、紀元前 3-2 世紀）などがある。
- (46) 江上、前掲書、42、67-68 頁。
- (47) ロシア科学アカデミー考古学者ビョートル・クズミッチ・コズロフ（1908-1965）らにより大型壙墓等から発掘された遺物、約 1300 点に含まれる。
- (48) モンゴル国立博物館が所蔵する裂断片は常設展示され、その他裂断片は特別展示で公開された（2021 年 11 月 30 日から 2022 年 3 月 1 日まで）。他に、ロシアのエルミタージュ美術館が所蔵する裂断片（MP-1957、MP-190）がある。
- (49) N. ツルテム「解説①モンゴルの装飾応用工芸」『モンゴルの美術 2 モンゴル曼荼羅美術工芸』新人物往来社、1988 年、9 頁。
- (50) 江上、前掲書、16 頁。
- (51) 江上、前掲書、35 頁。
- (52) N. ツルテム「解説①モンゴルの装飾応用工芸」『モンゴルの美術 2 モンゴル曼荼羅美術工芸』新人物往来社、1988 年、6 頁。
- (53) Yadamsuren, U., Sodnom, B., *op. cit.*
- (54) ジョーゼフ・キャンベル『野に雁の飛ぶとき』武舎るみ訳、角川書店、1996 年、38 頁。
- (55) 島村一平『ヒップホップ・モンゴリア：韻がつむぐ人類学』青土社、2021 年、158 頁。
- (56) 嵯峨治彦「草原に響く神秘の歌声『ホーミー』」『ワールド・カルチャーガイド〈22〉モンゴル——草原の国を好きになる』トラベルジャーナル、2001 年、108-109 頁。
- (57) 【使用機材】メーカー：Gramotech ソフトウェア名称及びバージョン：GT Analyser ver. 19.10.0
- (58) 藤井知昭他『民族音楽概論』東京書籍、1992 年、17 頁。
- (59) B. C. J. ムーア『聴覚心理学概論』誠信書房、1994 年、245-246 頁。
- (60) 服部等作「チベット族の生活と信仰のなかの工芸美術」『アジア遊学 23 チベット族の美術と芸能』地球文化創造勉強出版、2001 年、31 頁。
- (61) 中村元他編『岩波仏教辞典第二版』岩波書店、2002 年、38 頁。
- (62) 曹栄梅「中国内モンゴルにおける磚茶文化——茶馬交易が結んだ乳と茶」、名古屋大学学術機関リポジトリ、2015 年 3 月 5 日、甲第 10910 号、193 頁。
- (63) 楊海英「モンゴルにおける「白いスウルデ」の継承と祭祀」『みんぱくりポジトリ——国立民族学博物館研究報告別冊 20 号／ユーラシア遊牧社会の歴史と現在』2010 年 2 月 26 日、100 頁。
- (64) ソロンガ「『伝統』の継承、再創造、移植：内モンゴル自治区における「白いスウルデ」祭祀の「復興」をめぐる」『ヒマラヤ学誌』13、2012 年、211-224 頁。